

小学校国語・道徳教材「泣いた赤おに」の主題についての再検討

A Reconsideration of the Main Theme of “Naita Akaoni” a Japanese Reading Material for Elementary School Students

宮川 久美

MIYAGAWA Hisami

この作品は、国語の教材としても道徳の教材としても、心から友を思う友情・真の友情を主題としていると考えられている。そして、「互いに」とは言いつつ、むしろ青おにの、友達のために自己を犠牲にする行為の方に主眼が置かれているようである。

しかし、本稿ではこの作品の主題について再検討し、主人公は赤おにであること、青おにの行為は善意から発したものではあったが、真に赤おにの気持ちを理解したものではなかったことを明らかにした。この作品は、「おに」として生まれてきた主人公の赤おにが、「私はおにに生まれてきたが、おにどものためになるなら、できるだけ、よいことばかりをしてみたい。いや、そのうえに、できることなら、人間たちのなかまになって、なかよくくらししていきたいな。」という望みを持ちながら、「おに」は乱暴者である、という偏見差別から自らも自由になれなかったがゆえに、その願いを叶えることの出来なかった悲しみを描いていると考えた。

このような、「おに」と「人間」との関係性は、子どもたちの身の回りでも多々あり得ることである。大は、国家間でも民族間でも、村のような共同体の間でも、小は、家と家との関係でも、友達集団同士の関係でも、身近にあるだろう。真の友情、真の融和とは何かを考えるのに適した教材として扱ってこそ、この作品の主題が活かされるだろう。

キーワード：小学校国語教材，小学校道徳指導資料，濱田廣介，「おにのさうだん」，「鬼の涙」，青おに，友を思う友情

Key Words: Primary school, Japanese Textbook, Morality guidance material, Hamada Hirotsuke, “Oni-no-Soudan”, “Oni-no-Namida”, Blue ogre, Sincere Friendship

1. はじめに

浜田廣介作「泣いた赤おに」は、1971（昭和46）年および1974（昭和49）年に、日本書籍、東京書籍、光村図書出版の小学校三年生または二年生の国語教科書に採用され、その後、1977（昭和52）年にも日本書籍の小学校三年生の国語教科書に採用されたが、これらは、読書して感想文を書くということを趣旨としたもので、作品そのものは掲載されていない。この単元で指導すべき事項の第一としては、たとえば、光村図書の『小学新国語学習指導書2』¹⁾においては、「童話を読んで、もっとも感動したことを書くこと」とする。そして、「豊かな人間性を育てる」という項目の下に、「「泣いた赤おに」の場合も、なぜ赤おにのために青おにがこうした行為をとったのかを考えさせないと、単に「親切な、えらいおに」という表面的なおさえに終わる心配がある。村人と赤おに、赤おにと青おにとのかかわり合いから、真の友情というものについても考えていけるように読みを深めさせていきたい。」とする。

その後2011（平成23）年に再び教育出版の小学校二年生の国語教科書「ひろがることば小学国語2下」に採用され、本稿「2. テキストについて」の表1の⑦を出典とする全文が掲載された。全文掲載するならば、廣介自身が「できますことなら、元の作をそっくり読んでいただきたい」²⁾と述べているのだから、同⑧のテキストを採用すれば良かったのではないかと思うが、幼児向けに簡略化したという意味で⑦を採用したのであろう。『ひろがることば小学国語2下 教師用指導書 解説・展開編』³⁾には【ここが大事】として

物語は、登場人物が、あるできごとをきっかけにして変わっていくというのが基本形である。変わるの気持ちであったり、行動であったり、ものの見方・考え方であったりする。人物を変えるきっかけには、ほかの人物が関係していることが多い。「ないた赤おに」では、友達の青おにの存在は欠かせない。二人の言動をとおして、ふたりの変容をとらえることが大切である。

とし、【叙述について】という項目の下に、

「そうか、それならこうしよう。……」（赤おにのために考えた、青おにの作戦。）
 「……きみにたいしてすまないよ。」（友達の青おにに対する赤おにの気持ち。）
 「なあに、ちっともかまわない。……」（赤おにのために思う青おに。）
 「だめだめ、しっかりうつんだよ。」（赤おにのために思う青おに。）
 「いいから早くにげたまえ。」（これ以上、青おにを痛めつけない赤おに。）
 「青くん、まてまて。いたくはないか。」（青おにを気づかい、心配する赤おに。）
 ……ぐあいがわるくて、ねているのかな。……（青おにを心配する赤おに。）
 赤オニクン、……（青おにからの手紙。赤おにのことを考えて居なくなってしまった青おに。）

のように登場人物の気持ちを解説する。赤おにと青おにとの互いに相手を思いやる気持ちを読み取らせたいようである。そして、「互いに」とは言いつつ、むしろ青おにの、友達のために自己を犠牲にする行為の方に主眼が置かれているようである。

また『文部省小学校道徳の指導資料 第2集』⁴⁾ 第2学年に資料名「ないた赤おに」として示されて以来、道徳教材としても多くの学校で活用されている。この指導資料に示された指導案は、その主題について、「心から友を思う（友情）」とし、「「ないた赤おに」は、青おにの赤おにに対する献身が深く心を打つ物語で、「心から友達を思い、行動する」という視点からも、友達とのかかわりを考えさせるためにふさわしい資料である。」としている。この教材を使った学習活動のねらいとしては「友達と互いに理解し、助け合おうとする心情を育てる」としている。この指導案は、この作品の道徳教材としての読み方に大きな影響を与え、管見に入る指導案はほぼこの読み方を踏襲している^{注1)}。国語の指導案も管見に入る限りでは「青おにの犠牲上なりたっている友情は本当といえるか」という課題を設定しているものが一つあるが⁵⁾、そのほかは道徳の指導案とほぼ同様である。

しかし、はたしてこの作品は「青おにの赤おにに対する献身が深く心を打つ作品」で、青おにの赤おにに対する「真の友情」を主題としているのだろうか、また、青おには本当に赤おにの気持ちやものの考え方を理解して行動したのだろうか。さらに、青おにの自己犠牲のおかげで、赤おにの願いは叶ったのだろうか。これらの疑問をとくために、以下、作品の構造と主題について再検討したい。なお、引用は表1の⑧『浜田廣介全集 第5巻』（1976（昭和51）年、集英社）⁶⁾ テキストによる。

2. テキストについて

浜田廣介は、掲載する雑誌の読者にあわせ何度も童話を書き直した。「泣いた赤おに」の題名も、①「おにのさうだん」から②「鬼の涙」、③「泣いた赤おに」と変遷している。内容も改稿が繰り返されており、③の「泣いた赤おに」は以前のものよりかなり簡略化されている。このテキストは⑦『日本児童文学大系 第13巻 浜田廣介集』（1977（昭和52）年、ほるぷ出版）に収録されており、向川幹雄は、同書解説において、幼年向けに廣介自身が手を入れて簡略化したものと考え⁷⁾としている。その後、④『浜田廣介童話集』（1953（昭和28）年、新潮文庫）、⑥「ないたあかおに」『むく鳥のゆめ』（1971（昭和46）年、潮出版社）が出版され、⑧『浜田廣介全集 第5巻』（1976（昭和51）年、集英社）の「泣いた赤おに」はこの④⑥のテキストを採用している。そして、同書凡例に「著

表1 「泣いた赤おに」変遷

① 「おにのさうだん」『カシコイ二年小学生』精文館，1933（昭和8）年
② 「鬼の涙」『童話童謡』第2号，童話童謡研究會，1934（昭和9）年
③ 「泣いた赤おに」『ひらかな教訓お伽噺 六の巻』宏文堂，1937（昭和12）年
④ 『浜田廣介童話集』新潮社，1953（昭和28）年
⑤ 『ないたあかおに』偕成社，1965（昭和40）年
⑥ 「泣いた赤おに」『むく鳥のゆめ』潮出版社，1971（昭和46）年
⑦ 『浜田廣介集（日本児童文学大系第13巻）』ほるぷ出版，1977（昭和52）年
⑧ 『浜田廣介全集 第5巻』集英社，1976（昭和51）年
⑨ 『ないたあかおに（おはなしえほん）』フレーベル館，1987（昭和62）年
⑩ 『ないたあかおに（おはなしえほん 第21集5）』フレーベル館，1987（昭和62）年
⑪ 『泣いた赤おに』偕成社，1993（平成5）年
⑫ 『ないた赤おに』金の星社，2005（平成17）年

者の意志を尊重し、底本は初出原稿作品を採らず、可及的に著者が新しく校訂を加えた単行本より採用した⁶⁾とある。そのほか、絵本では、偕成社⑤（1965（昭和40）年）から刊行されたものあとがきに筆者自身が「こんどの絵本にも、この作をやさしく書いて読んでもらうことにしました。」⁸⁾と述べており、これは幼児向けに簡略化したものである。また、フレーベル館から1987（昭和62）年に刊行された2種の絵本⑨⑩もほぼ同じテキストであり、⑩の絵本の筆者自身のアトがきに「絵本のためということで、作全体をちぢめすぎてしまうのですが、（略）できますことなら、元の作をそっくり読んでいただきたい²⁾と述べている。その後、⑪偕成社（1993（平成5）年）から刊行された絵本は⑧のテキストを採り、奥付に「この本は、「泣いた赤おに」の原作全文を載せています。絵本化のための一部省略・再話等はしておりません。」⁹⁾としている。⑫金の星社（2005（平成17）年）から刊行された絵本も⑧のテキストを採っている。

3. 作品の構造と主題

人生は、決断の連続である。大きな決断、小さな決断、無意識の決断、それらすべてに結果が伴い、その結果は責任を持って自分で引き受けなければならない。どのような決断をするか、それはつまり、その人の考え方、生き方である。そのような決断の連続がその人の生き方そのもの、人生そのものである。

物語は、ある人物がある状況下でどのような決断をしたか、その結果、どのような結果を引き受けることになったかを描くことによって、その生き方を通して作者の考えを述べるものである²⁾。物語を起承転結の四段階に分けると、もっとも重要なポイントである転は、主人公が決断したところである。起で登場人物の紹介や時と場所等、物語の舞台の設定をする。そして、具体的に語りたい出来事を語り始めるのが承である。決断の結果が、結である。

この考え方に従って、この物語の構成を見てもみることにする。起承転結の四段階に分けると次のようになる。

起 どの山か、わからない、その山のがけのところに家が一軒たっていて、若い赤おにが、たった一人で住んでいた。絵本に描いてあるようなおにとは、かたち、顔つきが、たいへんにちがっていたが、目は大きくて、きよろきよろして、あたまには、角のあとらしい、とがったものがついていた。赤おにはほかのおにとは違って、やさしい、すなおなおにだった。日頃から「私は、おににうまれてきたが、おにどものためになるなら、できるだけ、よいことばかりをしてみたい。いや、そのうえに、できることなら、人間たちのなかまになって、なかよくくらしていきたいな。」と思っていた。

承 そこで

ココロノ ヤサシイ オニノ ウチデス。
 ドナタデモ オイデ クダサイ
 オイシイ オカシガ ゴザイマス。
 オチャモ ワカシテ ゴザイマス。

という立て札を立て、毎日待っていた。しかし、人間は「おにはみんな、人間を取って食うかもしれない乱暴者」と思っているから、誰も怖がってやってこない。

転 くやしがっているところへ、友達の青おにがやってきて、「ぼくが、これから、ふもとの村においていく。そこで、うんとこ、あばれよう。」「あばれているさいちゅうに、ひょっこり、きみが、やってくる。ぼくをおさえて、ぼくのあたまをぼかぼかなぐる。そうすれば、人間たちは、はじめて、きみをほめたてる。」「安心をしてあそびにやってくるんだよ」と提案する。

赤おには、少しあわてて「じょうだんいうな」というのだが、説明を聞くうち、「ふうん。うまいやりかただ。」と少し心を動かされ、「しかし、それでは、きみにたいしてすまないよ。」と言って考え込むのだが、青おにに手をひっぱられ、せきたてられ、押し切られる形で、青おにの提案通りにしてしまう。

結 赤おには人間の友だちなかまができた。村から山へ、人たちは三人、五人とつれだつて、毎日でかけてきて赤おに手製のお茶とお菓子を食べに来るようになった。しかし、日かづがたつうちに、赤おには青おにのことが心がかりになり、訪ねていく。すると青おには留守で、戸のわきに、はり紙がしてあった。赤おにが青おにとつきあっていることが人間に知られたらやはり赤おにも乱暴者のおにの仲間だったのかと疑われかねない、青おには、赤おにが仲間ではないことを人間に示すため、赤おにの前から姿を消したのだった。赤おには青おにの手紙を二度も三度も読み、青おにの家の戸に手をかけて、顔をおしつけ、しくしくと、なみだをながして泣いた。

まず、この物語の主人公は誰か。それは赤おにであると筆者は考える。初めに場面設定をし、赤おにの紹介、日頃から彼がどのような人物であるのか説明した後、ある出来事を語り始める。そして、彼は決断をせまられ、決断する。そしてその結果を引き受けなければならない。彼の決断には青おにが重大な関わりを持つが、あくまでも決断した人物はこの作品の中では赤おにであり、赤おにがこの物語の主人公である。

次に、青おには本当に赤おにの気持ちやものの考え方を理解して行動したのだろうかということについて考えるため、赤おにの望んでいたことは何だったのか、再確認したい。それは最初に

私は、おににうまれてきたが、おにどものためになるなら、できるだけ、よいことばかりをしてみたい。いや、そのうえに、できることなら、人間たちのなかまになって、なかよくくらししていきたいな。

と明記されている。まず第一の望み「おにどものためになるなら、できるだけ、よいことばかりをしてみたい。」そしてそのうえに、第二の望みとして「できることなら人間たちのなかまになって、なかよくくらししていきたい」という二つである。そしてこのような気持ちは

ほんとうに、その赤おには、ほかのおにとは、違う気持ちをもっていました。

とある。逆に言うと、ほかのおにはそのような気持ちは持っていないということである。

たしかに、

「どうしたんだい。ばかに手洗いことをして、きみらしくもないじゃないか。」
 青おには、えんりよしないで、ちかよりながらいいました。
 赤おには、いつとき、きまりがわるそうな、はずかしそうな顔をしました。

にげていくおじいさん、おばあさんには、ちつとも用がありません。青おには、中にはいると、さっそくに、さら、はち、ちゃわん、ちゃがまなど、手あたりしだいにてにとつてなげつけました。ごはんいれも、なげつけました。ごはんつぶがそこらにとんで、しょうじのさんや、柱のかどにくつつきました。みそしるのなべは、ころげて、しるは、炬ぶちを、たらたらとしたたりました。がらがら、がちゃん、がちゃりん、ちゃりん、どたん、ばたん、青おには、とんだり、はねたり、さかだちしたりしていました。「まだ、こないかな。」

などの記述からは、青おにも、赤おにのよい友だちで、本当は人間に対して乱暴をはたらくような者ではないことが窺われる。

しかし、彼らはおにとしては例外的で、ほかのおにとは違う気持ちを持っているのであり、一般に「おに」というものは人間にとっては「みんな、らんぼう者」で「だまして、とつてくう」かもしれない「ゆだんのできない、あやしいやつだとだれでも思う」ものである。青おにの提案も、「おには乱暴者である」という人間のおにに対する観念を前提として認め、むしろその観念を利用しようとしているのである。「私は、おににうまれてきたが」の「が」は逆接の接続助詞である。そのような油断のできない、怪しい乱暴者の「おに」というものとして生まれてきたけれども、そうではない生き方がしたいと赤おには望んだのである。赤おには「それを、自分ひとりのこころのなかに、そつとそのまま、しまっておけなくなり」、立て札をたてたのであるが、もちろん、人間にとっては、その赤おにが、ほかのおにとは、違う気持ちをもっているかどうかなどあずかり知らぬことであるから、

「なんだか、ひっそりしているよ。」「きみが、わるいな。」
 「さては、だまして、とつてくうつもりじゃないかな。」
 「なあるほど、あぶない、あぶない。」

と言って入ってこないのである。このような壁が「おに」と「人間」の間に立ちはだかっているのが現実であった。赤おにはほかのおにとは違う気持ちを持っていて、優しい素直なおにだったが、その姿形は、

目は大きくて、きよろきよろしていて、あたまには、どうやら、角のあとらしい、とがったものがついていました。

とあるとおり、自他共に誰が見ても「おに」という集団の一人なのであった。

さて、赤おにがくやしがつて、せっかく作った立て札をへし折り、踏みつけているところへ青おにがやってきて提案する。青おにの提案は、自分が村でうんとこ暴れ、それを赤おにがぼかぼかなぐる。そうすれば、人間たちは、はじめて、赤おにをほめたてる。というものだった。提案通りにすることによって、

「これは、どうしたことだろう。」
 「おにはみんな、らんぼう者かと思っていたのに。」
 「あ、赤おには、まるきりちがう。」
 「まったく。まったく。してみると、あのおにだけは、やっぱりやさしいおになんだ。」

赤おには人間の信頼を得て、第二の望み「できることなら人間たちのなかまになって、なかよくくらしていきたい」という望みは叶ったように見える。しかし、それは、「やっぱりおには乱暴者なのだ」と再認識しつつ、「おにはみんな、らんぼう者かと思っていたのに」「あの、赤おには、まるきりちがう」「あのおにだけは、やっぱりやさしいおになんだ」と思うという例外的な信頼であった。おに全体と人間全体の融和ではなく、赤おにが青おにとつきあっていることが人間に知られたらやはり赤おにも乱暴者のおにの仲間だったのかと疑われかねない、そのような危うい例外的な信頼であった。赤おにが望んでいたのはそのような例外的な融和ではなく、「おに」と「人間」が友だちになって仲良く暮らしていくことだったはずである。なぜならば、赤おには、まず第一に「おにどものためになるなら、できるだけ、よいことばかりをしてみたい。」と望んでいたものであり、仲間のおにとともに、そしてその上に人間たちとも仲良く暮らしていきたいかったのである。

青おにの手紙を二度も三度も読み、戸に手をかけて、顔をおしつけ、しくしくと、なみだをながして泣いた赤おに。このような結果は赤おにが望んでいたものではなかっただろう。

そこで初めの疑問——青おには本当に赤おにの気持ちやものの考え方を理解して行動したのだろうか、に立ち戻ると、否と答えざるを得ない。

おにというものは人間から見ると乱暴者の集団なのである。そう思われても仕方のない、たしかに乱暴者もいるのである。しかし、赤おには心の優しい素直なおにで、仲間のおにたちに対してもいいことばかりをしたい、その上に人間たちとも仲良く暮らしていきたい、と考えていた。それならば、そのために本当に必要なことは、何なのか。よくよく考えなければならなかった。ひとり赤おにだけが例外的に「いいおに」なのではなく、「おに」というもの全体が「いい者どもの集団」だという信頼を人間たちとの間に築かなければならなかった。そのためには小手先の芝居ではなく、人間たちの誤解や偏見や差別意識があればそれを解き、もし乱暴者のおにがいれば、教育して乱暴をはたらかないよう穏やかにさせ、人間からの「いい者どもの集団」との信頼を築き上げる必要があった。その地道な努力の結果として、人間全体とおに全体のゆるぎない信頼関係・融和が実現するのではなければならなかった。ただし、これはもちろん一方的におにの側だけに努力が求められるべきではない。双方からの努力を要する。しかし、今は、赤おにとしてはどうすべきであったかという、赤おにの決断がテーマとなっている。

真の信頼関係を築く—これはなかなか困難なことで、小手先の芝居で人間をだまして実現するようなことではなかった。青おには、親友の赤おにの真に望むところをよく汲み取るべきであった。

しかし、このような望まない結果になったのは、青おにの責任ではない。赤おにの決断が間違っていたことによる。それは、青おにの提案による芝居をするという決断である。たとえそれが、自分が思いついたのではなくても、何だか違うなと思いつつ青おにに押し切られたのであっても、やはり、赤おにが責任を取らねばならない、彼の決断なのである。青おにに提案されたとき、「ふうん。うまいやかただ。」とってしまったこと、「青くん、それは違うよ」ときっぱり言って青おにに自らの望むところを明確に説明できなかったということは、赤おに自身明確にわかっていなかったということである。赤おには、単に自分一人が人間と仲良くなるのでは「おにどものためになるなら、できるだけ、よいことばかりをしてみたい。」という望みにはそぐわないことを自分でも明確に意識し、青おにに教えねばならなかった。

それが出来なかったために、青おにを失うことになってしまった。青おには赤おにのためになると思ってしたことだが、友を失った赤おには本当に悔やんだことだろう。青おににせきたてられてじっくり思案する時間がなかったことには同情の余地はある。しかし、とっさの決断であってもその決断については人生において責任を取って結果をひきうけなければならないのである。

もっとも、青おにの提案が、親友の赤おにのためにという献身的な気持ちに発したもの

であったこと自体は認められる。青おにが提案したときの言葉や態度、表情について、廣介が「元の作」と自負しているらしい⑧の『全集』版において^{注3)}、「痛い思い」「犠牲」「身がわり」という言葉を青おにに発せしめ、「もの悲しげな目つき」「あっさりといいました。」と描写しているからである。

「ふうん。うまいやりかただ。しかし、それでは、きみにたいしてすまないよ。」
 「なあに、ちつとも。水くさいことをいうなよ。なにか、ひとつの、めぼしいことをやりとげるには、きっと、どこかで、いたい思いか、損をしなくちゃならないさ。だれかが、ぎせいに、身がわりに、なるのでなくちゃ、できないさ。」
 なんとなく、ものがなしげな目つきを見せて、青おには、でも、あっさりといいました。「ねえ、そうしよう。」
 赤おには考えこんでしまいました。
 「また、しあんかい。だめだよ、それじゃ。さあ、いこう。さっさと、やろう。」
 青おには、立とうとしない赤おにの手をひっぱって、せきたてました。

青おにの心情について作者がこれ以上描写していないので、以下に述べることはあくまでも筆者の深読みにすぎないが、青おにとしては、赤おにのために、自己を犠牲にして、身代わりとして「嫌われ者のおに」を一身に引き受けようという思いがあったと読み取れる。悲しみとあきらめの痛みをとまなう思いだったと思われる。そして、赤おにの真に望むところを知っていた可能性もないではない。赤おにの気持ちを理解していないわけではなかったが、おにと人間が仲良くなるなんてとても無理だと悲しい気持ちで思ったのではなかったか。粘り強く努力してもそれは無理だと、あきらめたのが、「あっさり」とに現れているように思われる。次善の策として、君だけでも人間たちと仲良くなれるようにしよう、ぐずぐず考えたって無理だよ、さっさとやろう、という気持ちだった可能性はある。そうだとするとすでに赤おにの前から姿を消すことを覚悟していたはずである。その点では、確かに青おにの友情は涙ぐましく思われる。このように青おにの善意を最大限に読み取ったとしても、それでも、やはりそれは、青おにの考えの方向に赤おにを引っ張ったものであり、赤おにの気持ちに真に寄り添ったものとはいえないだろう。

⑤『浜田廣介全集 第5巻』の村松定孝による解説¹⁰⁾に以下のようにある（下線は筆者）。

私は本作を幼児に語り聞かせるお母さんや幼稚園の保母さんや小学低学年担当の先生たちに、これを味わわせる上での注文があるので、それをここでは述べることにしたい。
 おにと聞いただけで、こわがりいやがる村人に、なんとかして、おに族との交流をはかりたくて、友人の赤おにを信用させるため、青おにが犠牲になるところに、おに同士の友情があり、同時に献身の美しさのあることを、子どもたちに、気づかせたいわけだが、作者の真意は、もっと深いところにあることを指導者は知っていてほしい。
 世の中というものは、自分ひとりがいい子になろうとしても、けっしてうまくいくものではなく、おたがいが助け合って、社会全体をよい方向にむけていき、人類の平和をねがうことこそ、ほんとうの人間の生き方である。

ここまでを読む限り、世の中というものは赤おにひとりがいい子になってもうまくいくものでなく、お互いが（青おにと赤おにが、また、おに族と人間族が）助け合って社会全体をよい方向に向けていき、人類——（おにも人間も含む）の平和を願うことこそ、あるべき生き方であると言っているように受け取れる。そうだとすると私の考えはこれと同じだと思われるのだが、しかし、続けて次のようにある。

青おには、それを実践し、遠く去っていった。青おには、赤おにの顔がみたくなくなって旅立っていったのではない。もとより、赤おにを心から愛している。けれども、このままつき合いをつづけていけば、人間の赤おにに対する疑いをとくことができないと思ったから去ったのである。これは、なかなかできないことである。基本的な人権などを主張する人間には真似のできることはない。青おには、おにと人間の交流社会における、いわば生存権をあえて放棄して、決してかなしんではないのである。こんな、わりのわるい役割はない。

しかし、彼の胸には、どこまでも青おに^{註4)}とは友だちだというほろびざるユマニテが保有されている。そして、赤おにと人間が親しみ合えるように仕組んだ計画者としての、創意者としての自己を、神が認めるであろうことへのよろこびがある。

ここを、この青おにの行為と彼の真心とを、しっかりと児童にさとらせてほしいのである。ここにこそ、本作が単なる勧善懲悪でない、善意の文学としての真価があることを。

「青おにはそれを実践し」とある「それ」とは、先に述べている「おたがいが助け合っ
て、社会全体をよい方向に向けていき、人類の平和をねがう」ことなのではないかと思う
のだが、それを実践することが、なぜ、「人間の赤おにに対する疑いを解く」ために「遠
く去って行」くことになるのだろうか。赤おにひとりをいい子にして、「おにはやっぱり
悪者だ」という認識を人間に持たせて去っていくのがどうして社会全体をよい方向に向け
ることになるのか。しかし村松氏は「この青おにの行為と彼の真心とを、しっかりと児童
にさとらせてほしい」「ここにこそ」「善意の文学としての真価がある」という。結局の
ところやはり青おにの真心あふれる善意というものをこの作品の主題だとみているように
思われる。

⑫『ないた赤おに』（金の星社）に「浜田廣介と『ないた赤おに』、無償の愛の美しさ」と題する西本鶏介氏の文¹¹⁾を載せている。ここにも以下のようにある。

（前略）人間と赤おにを仲よくさせるため、みずから悪役を買って出る青おに。青おにの
心からの友情を知って涙を流しながら置き手紙を読む赤おに。（中略）人間のあるべき姿
としての無償の愛はどう時代がかわろうと読者の胸をうたずにはおかないはずです。

このように、従来の説は、すべて青おにの友を思う真の友情・赤おにに対する献身をこ
の作品の主題と考えている。しかし、この作品の主人公は赤おにであり、赤おにの生き方
考え方とその結果を、彼の決断を軸として描いているのであると私は考えるのである。

しかも、青おにの「心から友達を思い、行動する」「献身」のおかげで、赤おにの第二
の望み、「できることなら人間たちのなかまになって、なかよくくらしていきたい」とい
う望みは、少なくとも赤おに一人においては叶ったかという、それも叶わなかったと言
わなければならない。

赤おにと人間は本当の意味で友だち仲間になれたと見ることはできない。人間たちは村
から山へ、三人、五人とつれだつて、毎日赤おにの家へでかけてくるようになった。そし
て毎日毎日、赤おには手製のお茶とお菓子を振る舞う。しかし、常識的な村人同士のつき
あいからいえば、普通、もらいっぱなしというのはありえない。ものをもらえば何かの形
でお返しし、遣ったり取ったりのバランスを絶妙に取るのがつきあいというものだろう。
ところが、村人たちは「きみは昨日いったじゃないか」と、やや常識のある村人がたしな
めるほど、一方的に赤おにの家へ行つては、お茶とお菓子を食べてばかりなのである。こ
れでは普通の友だち仲間とは言えない。このことは立松和平のエッセイ「濱田廣介の作家
魂―泣いた赤おに―」（角川春樹事務所『浜田廣介童話集』）¹²⁾にも次のような
指摘がある。

ここで赤おには幸福になったのだろうか。善良な人間たちが毎日毎日家にやってきて、赤おにはお茶とお菓子を提供する。努力をやってもらってもきりもない世界の中に、赤おにはただはいってしまっただけではないのか。おにが悪で、人間が善だという価値観なのだが、こうして^{ただ}無制限にお茶を飲みに来てお菓子を食べて来る人間たちが善良そのものだと、とても私には思えないのである。

この一見バランスのとれないつきあい関係で、当事者たちが不具合を感じないのは、差別に慣れてしまっている両者の差別意識の裏返しであろうと筆者は考える。

出された茶を飲むということが何を意味するか、それは相手を差別していないという意思表示である。

島崎藤村の『破戒』に、同じく来客に茶を出す場面がある。丑松の留守に客が尋ねてきたとき、留守番をしていた叔母が茶を出そうとして手の震えを感じる場面である。以下は『島崎藤村集 I』（1971年 日本近代文学大系第13巻 角川書店）からの引用である¹³⁾。

蓮太郎は丑松の留守に尋ねて来たのであつた。『もう追付け帰つて参じやせう』（中略）

『生憎^{あいにく}と今日は留守にいたしやして——まあ吾^う家に不幸がごはしたもんで、その礼廻りに出掛けやしてなあ。』

斯^かう言つて、叔母は丑松の父の最後を蓮太郎に語り聞かせた。炉の火はよく燃えた。木製の自在鍵に掛けた鉄瓶の湯も沸々^{かきかき}と煮立つて来たので、叔母は茶を入れて款待^{もてな}さうとして、急に——まあ、記憶といふものは妙なもので、長く／＼忘れて居た昔の習慣を思出した。一体普通の客に茶を出さないのは、穢多の家の作法としてある。煙草の火ですら遠慮する。瀬川の家も昔は斯^かういふ風であつたので、其^{それ}を破つて普通の交際を始めたのは、斯^かの姫子沢へ移住^{うつ}してから以来。尤も長い月日の間には、斯^かの新しい交際に慣れ、自然^{おのづか}と出入りする人々に馴染^{なじ}み、茶はおろか、物の遣り取りもして、春は草餅を贈り、秋は蕎麦粉^{そば}を貰^{もら}ひ、是方^{こゝろ}で何とも思はなければ、他も怪^{あや}みはしなかつたのである。叔母が斯^か様な昔^{こゝろ}の心地^{ちこち}に帰つたは近頃無いことで——それも其^{その}筈^{はず}、姫子沢の百姓とは違つて気^き耻^づかしい珍客——しかも突然^{たしぬけ}に——昔者の叔母は、だから、自分で茶を汲む手の慄へに心付いた程。蓮太郎は其^{その}様なことゝも知らないで、さも／＼甘さうに乾いたのど^{のど}を濡^{うるほ}して、さて種々^{さまざま}な談話^{はなし}に笑ひ興じた。

同書補注八¹⁴⁾は、「筑摩書房版『藤村全集』第二巻の語注に次のようにある」と注する。

「穢多というのは、基本的には近世幕藩体制のもとで士農工商という身分秩序のさらに下に、非人とともにおかれた賤民身分をさし、社会の諸関係の中できわめて苛酷な差別と迫害を受けた。(以下略)」また、『社会外の社会 穢多非人』（柳瀬勁介・権藤震二著）の第五章を引用している¹⁵⁾。その冒頭部分には次のようにある。「維新以后、四民同権の制とともに新平民として穢多非人の呼称を去られしと雖も、新平民なる語は直に穢多非人の別語となりて毫も昔時の態を改めず。嫁婚の大事は勿論、共に一卓を囲み共に一同に座するが如き交際は決して望むべからず。門前に佇立し、言語を交へ、煙艸の火を与るさへ穢事なりとして喜ばざるは先づ普通の状態なりとす。」。被差別部落の人々に対する激しい差別排斥は『破戒』に如実に描かれているとおりである。だからこそ、丑松は父の厳命により、被差別部落の出身であることを隠していたのである。

説明するまでもないが、「普通の客に茶を出さない」作法があるのは、「普通の客」が「穢多の家」へ来て、茶を飲むということをいやがってしないからである。共に一卓を囲み共に一同に座することさえ嫌うのである。蓮太郎が何も知らずに茶を飲むのに丑松の叔母は手の震えを感じるほど葛藤しているのである。

しかし、赤おにはおにであることを隠してはいない。「おに」のまま、村人たちはつきあってきている。村人たちは赤おにを差別しないで家に上がり、卓を共にし、出された茶菓に口をつけられている。これだけでも「おに」を差別し、乱暴者と嫌っていた人間にしては大進歩なのである。茶菓を口にすることは「おまえはおにだが我々はおまえを差別せずに付き合っているよ」という意思表示である。赤おににしてみれば、それだけでうれしいことなのである。しかし、言うまでもなく、このような関係は、真の友だち仲間の関係、真の融和ではない。差別意識は両者において未だ解消されていないのである。

4. 終わりに

この作品を国語・道徳いずれの教材として読むにしろ、主人公は赤おにである。「おに」として生まれてきた赤おにが「私はおにに生まれてきたが、おにどものためになるなら、できるだけ、よいことばかりをしてみたい。いや、そのうえに、できることなら、人間たちのなかまになって、なかよくくらしていきたいな。」という望みを持ちながら、「おに」は乱暴者である、という偏見差別から自らも自由になれなかったがゆえに、その願いを叶えることの出来なかった悲しみを描いていると考える。

このような、「おに」と「人間」との関係性は、子どもたちの身の回りでも多々あり得ることである。大は、国家間でも民族間でも、村のような共同体の間でも、小は、家と家との関係でも、友達集団同士の関係でも、身近にあることであろう。偏見・差別はいじめにもつながる。真の友情、真の融和とは何かを考えるのに適した教材として扱ってこそ、この作品の主題が活かされるのではないだろうか。

謝辞

本稿をなすにあたり川端建治先生からご懇切なるご教示をいただいた。また本学図書館司書 能瀬澄美さん、黒田典子さんにも大変お世話になった。ここに記して感謝の意を表します。

注釈

注1) 『文部省小学校道徳の指導資料 第2集』⁴⁾に示された指導案に準じて、主題について、「心から友を思う(友情)」とし、「「ないた赤おに」は、青おにの赤おにに対する献身が深く心を打つ物語で、「心から友達を思い、行動する」という視点からも、友達とのかかわりを考えさせるためにふさわしい資料である。」とする例を以下に挙げる。

- ①EDUPEDIA(先生のための教育事典):「心から友を思う(道徳 指導案)」, https://edupedia.jp/article/53233f8c059b682d585b5fa9?km_saf_try_cnt=1 (2015.1.23)
- ②広島県:「第6学年 道徳学習指導案(指導者 杉原 明美, 第6学年1組32名, 主題名 友達を思う心(資料名「ないた赤おに」) 高2—(3) 信頼・友情)」, <http://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/89185.pdf> (2015.1.23)
- ③広島県:「第3学年 道徳学習指導案(指導者 小林 良子, 第3学年2組33名, 主題名 いつまでも友達(資料名「ないた赤おに」) 中2—(3)信頼・友情)」, <http://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/89172.pdf> (2015.1.23)
- ④岩手県立教育総合センター:「第3学年道徳学習指導案(指導者高橋雅子, 平成17年9月28日(水)5校時, 対象3年生(男14名、女17名、計31名), 主題名 ほんとうの友だち(友情・信頼、助け合い2—(3)), 資料名 ないた赤おに(文溪堂3年生のどうとく)」, http://www1.iwate-ed.jp/db/db2/sid_data/es/doutoku/e06do008.pdf (2015.1.23)
- ⑤南山大学教材ライブラリー:【指導案&学習素材】扶桑東小学校 道徳:「第4学年 道徳学習指導案, 【研究主題にせまる手だて】: 友達とのつながりを求めるようになってきた子どもたちに「本当の友達」について考えさせる機会にしたい。、主題名 友情について考えよう(2—(3)信頼・友情)」, <https://www.ic.nanzan-u.ac.jp/NINKAN/gp2007/>

library/sozai02_pdf/04do_04_09.pdf(2015.1.23)

- ⑥大阪府教育センター：「道徳学習指導略案，対象 小学校中学年，主題名【友情】2ー(3) (信頼・友情)，資料「泣いた赤おに」(明るい心)」，<http://www.osaka-c.ed.jp/sog/kankoubutu21/kankoubutu2107/004.pdf> (2015.1.23)
- ⑦白井市教育センター室：「第2学年3 国語科学習指導案，指導者 K.M，大山口小指導室訪問，国語科．単元名 本のせかいを楽しもう『泣いた赤おに』，「本単元『泣いた赤おに』は，友達の青おにの助けにより，赤おには人間たちと仲良く暮らすことができるようになるが，青おには作戦の発覚を恐れ，赤おにの為に自ら姿を消すという友情の物語である。」，<http://www.e-shiroi.jp/center/sidoan/shidouan/小学校/2年/大山口小/大山口小%20指導室訪問%20国語科.pdf> (2015.1.23)
- ⑧白井市教育センター室：「第2学年1組 国語科学習指導案，単元名 本のせかいを楽しむ『泣いた赤おに』『「お話びじゅつかん」をつくろう』，小学校2年桜台小 国語科指導案 泣いた赤おに (24年度)，「『泣いた赤おに』では，青おにや村人たちとの関わりを通して，赤おにの気持ちが動いていく様子を読み取ることへとつながっていくであろう。赤おにの「村人たちと仲良くなりたい」という願いを叶えるために力を貸した青おにの深い友情や，2人の芝居によって変わっていった村人たちの赤おにに対する見方をしっかりと読み取らせていきたい。そのことによって，赤おにの気持ちの想像を広げさせ，自分の言葉で表現できるようにさせていきたい。」，[http://www.e-shiroi.jp/center/sidoan/shidouan/小学校/2年/桜台小2年国語科/国語科指導案泣いた赤おに\(24年度\)/2の1%20泣いた赤おに指導案.pdf](http://www.e-shiroi.jp/center/sidoan/shidouan/小学校/2年/桜台小2年国語科/国語科指導案泣いた赤おに(24年度)/2の1%20泣いた赤おに指導案.pdf) (2015.1.23)

注2) この考え方は，奈良女子大学文学部国語国文学科在学中に森重敏先生の授業において，折に触れご教示いただいたものである。

注3) 「昌子佳広「浜田廣介「泣いた赤おに」の教材化をめぐる(自由研究発表)」(『全国大学国語教育学会筑波大会発表要旨集』，122，pp.27-30 (2012))に指摘があり，「元の作」とは『全集』版のテキストを指すと見るのが自然であろうとしている。

注4) 「しかし，彼の胸には」の「彼」は，次の文「そして，赤おにと人間が親しみ合えるように仕組んだ計画者として」と記されていることから，「青おに」を指すと考えられる。「彼」を「青おに」とすれば，この「青おに」は「赤おに」の誤植であると考えられる。

引用・参考文献

- 1) 石森延男著：『小学新国語学習指導書2』，光村図書，pp.180-191 (1971)
- 2) 浜田広介文；若菜瑠絵：「あとがき」，『泣いた赤おに (おはなしえほん 第21集5)』，フレーベル館 (1987)
- 3) 教育出版株式会社編集局編：『ひろがることば：小学国語：教師用指導書 2下解説・展開編』，教育出版，pp.180-186 (2011)
- 4) 文部科学省：「新学習指導要領・生きる力 > 先生応援ページ (指導資料・学習評価等) > 言語活動の充実に関する指導事例集 > 言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】 > 第3章 言語活動を充実させる指導と事例 > 道徳」，『道徳-3 (第3学年) 話し合い活動を通して，一人一人の児童に自分の思いを表現させる事例』，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/12/1300872_3.p (2014.9.6 アクセス)
- 5) 文教大学 教職課程研究室 栗加均：「ペスタロッチの教育論に基づく道徳授業」(2010.2.18 於：第33回ペスタロッチ祭)，<http://www.koshigaya.bunkyo.ac.jp/kyo-kyoshoku/33kuri ga%20shiryo.pdf> (2015.1.23)
- 6) 浜田廣介著：『浜田廣介全集 第5巻』，集英社 (1976)
- 7) 向川幹雄：「解説 二作家と作品」，『浜田廣介集：日本児童文学大系第13巻』，ほるぷ出版，pp.460-462 (1977)

- 8) 浜田廣介ぶん；池田龍雄え：「あとがき」，『ないたあかおに』，偕成社（1965）
- 9) 浜田廣介作；梶山俊夫絵：「奥付」，『泣いた赤おに（日本の童話名作選）』，偕成社（1993）
- 10) 村松定孝：「《解説》浜田廣介の童話と人生3「泣いた赤おに」のユマニテ」，『浜田廣介全集 第5巻』，集英社，pp.253-254（1976）
- 11) 西本鶏介：「浜田廣介と『ないた赤おに』“無償の愛の美しさ”」，『ないた赤おに（大人になっても忘れたくないいもとようこ名作絵本）』，金の星社，p.48（2005）
- 12) 立松和平：「エッセイ浜田廣介の作家魂：「泣いた赤おに」から」，『浜田廣介童話集（ハルキ文庫は6-1）』，角川春樹事務所，p.219（2006）
- 13) 島崎藤村著：「島崎藤村集Ⅰ（日本近代文学大系第13巻）」，角川書店，pp.142-143，（1971）
- 14) 島崎藤村著：「島崎藤村集Ⅰ（日本近代文学大系第13巻）」，角川書店，p.439（1971）
- 15) 島崎藤村著：「島崎藤村集Ⅰ（日本近代文学大系第13巻）」，角川書店，p.440（1971）
- 16) 秋山虔〔等〕著：『小学国語 3下』，日本書籍（1977）
- 17) 石森延男著：『しょうがくしんこくご 2年上』，光村図書出版（1971）
- 18) 石森延男著：『しょうがくしんこくご 2年上』，光村図書出版（1974）
- 19) 大石初太郎〔等〕著：『新しい国語 3下』，東京書籍（1971）
- 20) 大石初太郎〔等〕著：『新訂新しい国語 3下』，東京書籍（1974）
- 21) 山本有三，石井庄司，桑原武夫編集：『小学国語 3下』，日本書籍（1971）
- 22) 山本有三〔等〕著：『小学国語 3下』，日本書籍（1974）

A Reconsideration of the Main Theme of “Naita Akaoni” a Japanese Reading Material for Elementary School Students

MIYAGAWA Hisami

Abstract

This is a story which is often used as a teaching material for both Japanese language and moral education. Its subject is usually interpreted to represent true friendship. It seems that the story focuses on one's sacrificial behavior to the other, rather than “mutual” consideration.

In this paper, I'd like to reconsider the subject of this story. I concluded that this story described the sorrow of Aka-oni (red ogre, the main character of the story). I examined the story as follows: although Aka-oni hoped to be kind and friendly to humans and do only good to humans as much as possible, he himself couldn't get away from the prejudice that “ogres” are violent. Aka-oni couldn't realize his hope because of the failure to escape from the prejudice and this is the sorrow represented in the story.

Such relationship between “ogres” and “humans” can often be seen in children's surroundings as well, ranging from nation-to-nation, race-to-race, or community-to-community relationships and relationships between families or group of friends. I consider the subject of this story would be truly understood and thus meaningful when treated as a material to have students think about what is true friendship or what is true integration.

Key Words : Primary school, Japanese Textbook, Morality guidance material, Hamada Hirotsuke, “Oni-no-Soudan”, “Oni-no-Namida”, Blue ogre, Sincere Friendship